

二〇一七年九月一九日(参加者一四名)

四散して斑猫我を惑はしむ

せいじ

ほろほろと連理の句碑にこぼれ萩

うつぎ

つくばひの水面に立ちし秋の風

せいじ

豪勢な精進料理子規祀る

うつぎ

小流れの岩間岩間に蛍草

せいじ

磊々の汀を綴る彼岸花

ぽんこ

せせらぎに和して合唱つくつくし

せいじ

道をしへ日の射す岩に玉びかり

ぽんこ

草の花森の洩れ日に笑むごとし

菜々

朱の中に一茎白き彼岸花

はく子

歩を止む吾を虜とす群蜻蛉

菜々

秋澄むや天使の像に日の燦と

満天

せせらぎへ枝垂れし一枝薄もみぢ

菜々

蹲居に木賊の影の揺れやまず

宏虎

御簾のごと萩の枝垂るる石畳

よう子

法話聞きつつ句作しぬ彼岸寺

有香

こぼれ萩沙弥の箒に掃かれけり

よう子

彼岸花延命橋の橋袂

よう子

定例会会みのる選

斑猫の出迎え多き山路かな

わかば

二〇一七年九月一九日(参加者一四名)

秋の日を弾きて湖の藍深し

わかば

石走る著き瀬音や秋山路

わかば